漢字・カタカナの混淆文を読む　その1

―『今昔物語集』(京都大学附属図書館藏国宝、鈴鹿本)　―

2006.06.28～2009.06.17更新

萩原　義雄

はじめに

これまで、ひらがな・カタカナについて基礎的な事柄について学習を深めてきました。ここで、漢字とカタカナとを混淆して仕立てられた文章を読んでみたいと思います。資料としては、京都大学附属図書館所蔵の国宝鈴鹿本『今昔物語集』(HP「透過インタフェース版」及び「動インタフェース版」、「スタンダード版」)を基にこの学習を進めていきます。

三十一巻から成る仏教説話集及び世俗説話集のなかで、天竺(インド)巻一～五、震旦(中国)巻六～十、本朝(日本)巻十一～三十一の三国世界を部ごとにそれぞれの説話譚を収載しています。現存する舊鈴鹿藏本(巻八、十八、二十一は他写本共欠本)については、京都大学附属図書館が所蔵しています。その成立年代は、保安元(一一二〇)年頃を上限とする資料です。この説話解説については、紀田順一郎『日本の書物』の『今昔物語集』を参照なさってみてください。

『今昔物語集』に於ける国語資料としての意義

直接会話の表現は、写実性をもって蘇ってきます。漢文訓読文とは異なる、日本語式文体がその読みやすさを感じさせてくれます。問題は、漢字にて表記されたことばである漢語や和語をどう訓むのかということになっていました。この説話数一千二十に及ぶ全文の解読が近代日本において始まったのです。というのも、古川千佳さんの解説にあるように、『今昔物語集』は内包する多様性、迫力ある描写、等々さまざまな魅力をもつ作品であるにもかかわらず、その名が後行現存の文献中に登場するのは室町時代の僧・大乗院経覚の日記『経覚私要鈔』宝徳元(一四四九)年七月四日の条「四日、霽、夕立、今昔物語七帖返遣貞兼僧正畢、……」が初めてであるからです。中世を通して他に現われず、次に出てくるのは近世初期ともいえる『多聞院日記』の天正十一(一五八三)年十一月八日条「……今昔物語十五帖大門ニ在之　南井坊へ返遣了」となっています。古本系といえども、伝写本のほとんどが近世以降のものであることを考え合わせますと、『今昔物語集』は鈴鹿本が中世初期に書写された後、長い眠りについていたと考えられる」とあることがこの資料の流布が遅れたことを如実に知らしめています。これと同時に、写本資料の補修、そして複製本刊行、さらには、インターネット上による全面資料公開がなされるに至ったことがこの資料を近年、第一級品の資料としての価値を人々が認め、研究利用が容易になったことが指摘できます。このことは、若い国語学・国文学の研究利用者にとって朗報をもたらせました。この研究に欠かせない解読テキスト・データをいち早く利用できるように整備したことは、利用した者のみが知る至福なのかも知れません。その至福を次の研究者に伝え継承していく、そのうえで、この『今昔物語集』は、絶好のテキストに成りえたということです。この経緯を文学部教授安田章さんが「鈴鹿本　今昔物語集をめぐって」(京都大学附属図書館報「静修」Vol. 28, No. 3（一九九一年十二月発行)に書きとどめています。

『今昔物語集』本文の実際

ここで、実際の現なる資料のなかから、天竺部・震旦部・本朝部から各々一話ずつを眺めておきましょう。

天竺異形天人降語第三十五〔巻第二〕

今昔、天竺ニ天ヨリ一人ノ天人降タリ。其ノ身、金色也。但シ、頭ハ猪ノ頭也、諸ノ不浄所生ノ類ヲ求メ食ス。諸ノ人、此ノ天人ヲ見テ奇異ノ思ヲ成シテ、佛ニ白テ言サク、「此ノ天人、前世ニ何ナル業有テカ、身ノ色金色也ト云ヘドモ、頭ハ猪ノ頭也、諸ノ不浄所生ノ類ヲ求メ食スル」ト。佛、説テ宣ハク、「此ノ天人ハ過去ノ九十一劫ノ時、毘婆尸佛ト申ス佛、世ニ出デ給ヘリ。其ノ時ニ此ノ天人、女人ト生レテ人ノ妻ト有リキ。其ノ家ニ沙門来テ乞食シキ。夫、金ヲ施セムト云ヒシニ、妻、慳貪ナルガ故ニ心ヲ誤マリ、面ヲ赤メテ瞋恚ヲ発シテ夫ノ乞食ニ金施スル事ヲ止テキ。其ノ罪ニ依テ、其ノ妻九十一劫ノ間、此ノ果報ヲ得タル也。又身ノ金色ナル事ハ、[v.2.p.147-148]其ノ沙門ニ値テ一度腰ヲ曲テ礼拝シキ。其ノ功徳ニ依テ金色ノ身ヲ得テ光ヲ放ツ也。然レバ天ニ生タリト云ヘドモ、悪業ノ残レル所、如此也」ト説給ケリトナム語リ傳ヘタルトヤ。

と云った具合に、漢字とカタカナの表記をそのまま訓読していくことが出来ます。漢文のように返り点を用いて返読する形態を既に脱却していることが判明します。ですが、漢字表記の文字を和語で読むのか漢語で読むのかを決定することは、書き手から読み手に委ねた読解能力に及んでいます。たとえば、この譚のなかに「頭」とある文字をどう読むか、前後の文脈を理解したうえで読むことが必要とされてきます。前文に「身」ということばが用いられていますから、和語読みと考えて良いことになりましょう。ですが、和語におけるこの語の読みには「かしら」「あたま」と二語の訓があります。このいずれかを分別することが問われてきます。これと同じように「妻」という語も「め」と「つま」という二通りの読みが考えられます。みなさんは、これをどう判断しますか？また、すべてを和語で読むことはありえません。この譚では、「天竺」「天人」「金色」「不浄所生」「奇異」「前世」「業」「過去」「九十一劫」「毘婆尸佛」「女人」「沙門」「乞食」「慳貪」「瞋恚」「果報」「一度」「礼拝」「功徳」「悪業」などといった仏教語性の熟語は、字音語読みが先に立つものと推測すべきものでありましょう。これらを想定し、當代の觀智院本『類聚名義抄』や『色葉字類抄』といった古辞書資料、経典音義書、訓点語彙などを以て比較検証を試みていくのです。現代の学術研究では、此等の語彙については、索引及び語注釈書を基本とした国語辞典に収載がなされ、特に小学館『日本国語大辞典』第二版や角川『古語大辞典』などを繙くことでこれらの用例を含めて意味内容を知ることが可能となってきています。でありますが、まずは、先に記述した比較資料を再度、ご自身で丹念に確認していくことも忘れてはならないことではないでしょうか。こうすることで、これらの語の特徴をより理会することに繋がるからです。同じように、「震旦部」も見てみましょう。

震旦法花持者、現脣舌語〔巻第七〕

今昔、震旦ノ齊ノ武成ノ代ニ、并洲ノ東ノ看山ノ側ニ、人有テ地ヲ堀ルニ、一ノ所ヲ見ルニ、其ノ色黄白也。人、此レヲ恠テ善ク尋ネ見レバ、其ノ形、人ノ上下ノ脣ノ似タリ。其ノ中ニ舌有リ、鮮ニシテ紅赤ノ色也。人皆、此レヲ見テ恠ムデ、帝王ニ此ノ由ヲ奏ス。帝王、此ノ事ヲ廣ク尋ネ問ヒ給フニ、此事ヲ知レリト云フ人无シ。其ノ時ニ、一人ノ沙門有テ、奏シテ云ク。「此レハ、法花經ヲ讀誦セル人ノ六根ノ不壊ザル事ヲ得タル脣・舌也。法花經ヲ讀誦スル事千返ニ満タル、其ノ霊験ヲ顕セル也」ト。帝王、此ノ事ヲ聞テ驚テ貴ビ給フ。其ノ時ニ、法花經ヲ受持セル人、皆、此ノ事ヲ聞テ、其ノ脣・舌ノ所ニ集マリ来テ、脣・舌ヲ圍繞シテ經ヲ誦ス。纔ニ初メテ音ヲ発ス時ニ、此ノ脣・舌一時ニ鳴リ動ズ。此レヲ見聞ク人、毛竪チ希有也ト思フ。此ノ□□亦帝王ニ奏スルニ、詔シテ石ノ箱ヲ遣シテ、其ノ中ニ此ノ脣・舌ヲ納メテ、室ニ移シ置キ給テケリトナム語リ傳ヘタルトヤ。[v.7.p.33-34]

ここで、和語動詞訓「恠（あやしみ）」「竪（いよだ）チ」などが注意すべき語でしょう。返読式の不読字「不」の語が一つだけ見え、これは「こはざる」と読むところです。字音語は、「震旦」「齊」「武成」「看山」「黄白」「上下」「紅赤」「帝王」「一人」「沙門」「法花經」「讀誦」「六根」「千返」「霊験」「受持」「圍繞」「經」「誦」「発」「一時」「動」「希有」「奏」などが拾えます。

最後に、「本朝部」を見てみましょう。

羅城門登上層見死人盗人語第十八〔第廿九〕

今昔、攝津ノ國邊ヨリ盗セムガ為ニ京ニ上ケル男ノ、日ノ未ダ明カリケレバ、羅城門ノ下ニ立隠レテ立テリ

ケルニ、朱雀ノ方ニ人重ク行ケレバ、人ノ静マルマデト思テ、門ノ下ニ待立テリケルニ、山城ノ方ヨリ人共ノ数来タル音ノシケレバ、其レニ不見エジト思テ、門ノ上層ニ和ラ掻ツリ登タリケルニ、見レバ、火鬙ニ燃シタリ。盗人、「恠」ト思テ、連子ヨリ臨ケレバ、若キ女ノ死テ臥タル有リ。其ノ枕上ニ火ヲ燃シテ、年極ク老タル嫗ノ白髪白キガ、其ノ死人ノ枕上ニ居テ、死人ノ髪ヲカナグリ抜キ取ル也ケリ。盗人此レヲ見ルニ、心モ不得ネバ、「此レハ若シ鬼ニヤ有ラム」ト思テ怖ケレドモ、「若シ死人ニテモゾ有ル。恐シテ試ム」ト思テ、和ラ戸ヲ開テ、刀ヲ抜テ、「己ハ己ハ」ト云テ走リ寄ケレバ、嫗手迷ヒヲシテ、手ヲ摺テ迷ヘバ、盗人、「此ハ何ゾノ嫗ノ此ハシ居タルゾ」ト問ケレバ、嫗、「己ガ主ニテ御マシツル人ノ失給ヘルヲ、繚フ人ノ无ケレバ、此テ置奉タル也。其ノ御髪ノ長ニ餘テ長ケレバ、其ヲ抜取テ鬘ニセムトテ抜ク也。助ケ給ヘ」ト云ケレバ、盗人、死人ノ着タル衣ト嫗ノ着タル衣ト抜取テアル髪トヲ奪取テ、下走テ逃テ去ニケリ。然テ其ノ上ノ層ニハ死人ノ骸骨ゾ多カリケル。死タル人ノ葬ナド否不為ヲバ、此ノ門ノ上ニゾ置ケル。此ノ事ハ其ノ盗人ノ人ニ語ケルヲ聞継テ此ク語リ傳ヘタルトヤ。

この譚は、芥川龍之介が短編小説『羅生門』とした原文章として知られるものです。ここでは、字音語が「京」「羅城門」「朱雀」「門」「上層」「連子」「白髪」「死人」「層」「骸骨」などと僅かな使用になっていることが知られます。これに対して、和語の使用が増加していることも、

「盗人」「為」「上」「男」「日」「未ダ」「明カリ」「下」「立隠レ」「立」「方」「人重ク」「行」「人」「静マル」「思」「待立テ」「山城」「人共」「数来」「音」「其レ」「不見エジ」「和ラ」「掻」「登」「見レ」「火」「鬙」「燃シ」「盗人」「恠」「思」「臨」「若キ」「女」「死」「臥」「有リ」「其ノ」「枕」「上」「年極ク」「老」「嫗」「白キ」「居」「髪」「抜キ取ル」「也」「此レ」「見ル」「心」「不得ネ」「若シ」「鬼」「有ラ」「怖」「有ル」「恐シ」「試ム」「戸」「開」「刀」「抜」「己」「云」「走リ寄」「手迷ヒ」「手」「摺」「迷ヘ」「此」「何」「問」「己」「主」「御」「失」「給ヘ」「繚フ」「无ケレ」「此」「置」「奉」「御髪」「長」「餘」「長ケレ」「其」「抜取」「鬘」「抜ク」「助ケ給ヘ」「云」「着」「衣」「髪」「奪取」「下」「走」「逃」「去」「然テ」「上」「多カリ」「葬」「否」「不為」「此ノ」「置」「事」「語」「聞継」「此ク」「語リ傳ヘ」

と一目瞭然にして確認できます。この和語語彙を漢字で表記することは、その文字表記を當代の日本の教養溢れる知識人たちがこれを読み取ることが既に可能であったことを示唆しています。書くこと即ち読むことへと連続していることを想起させてくれています。では、現代の私たちが此等の語を十分に理会して読み表せるかを問い糺していることにもなりましょう。この意味からも、この説話譚から学ぶ日本語の世界は、計り知れない教養性が潜んでいると云って良いのではないでしょうか……。

国語資料としての『今昔物語集』に触れてみよう

ここで実際に、ご自分の読解力を以て、次の「震旦部」における「楊貴妃」の説話譚を上記に従って、是非同じようにして分析なさってみてください。

《応用編》

唐玄宗后楊貴妃、依皇寵被殺語第〔第十〕

今昔、震旦ノ唐ノ代ニ玄宗ト申ス帝王御ケリ。性、本ヨリ色ヲ好ミ女ヲ愛シ給フ心有ケリ。而ルニ、寵シ思シケル后・女御有ケリ、后ヲバ□后宮ト云ヒ、女御ヲバ武淑妃トゾ云ケル。天皇、此ノ人々ヲ朝暮ニ愛シ傅キ給ケル程ニ、其ノ二人ノ后・女御、相次キテ失ニケレバ、天皇、无限ク思ヒ歎キ給ケレドモ、甲斐无クテ、只、彼ノ人々ニ似タラム女人ヲ見バヤト、強ニ願ヒ求メ給ケルニ、人ヲ以テ求メ給ハムニ、心モト无クヤ思シケム、天皇自ラ宮ヲ出テ遊ビ行テ所々ヲ見給ケルニ、弘農ト云フ所ニ至リ給ケリ。其所ニ一ノ楊ノ菴有リ。其ノ菴ニ一人ノ翁居タリ、楊玄[エン]ト云フ。人ヲ以テ其ノ菴ニ入レテ令見給フニ、楊玄[エン]ガ一人ノ娘有リ、形チ端正ニシテ有様ノ微妙キ事、世ニ並ビ无シ、光ヲ放ツガ如キ也。使、此レヲ見テ、天皇ニ此ノ由ヲ奏ルニ、天皇、喜ムデ、「速ニ将参レ」ト仰セ給ヘバ、使、

彼ノ女ヲ将参タルニ、天皇此レヲ見給フニ、初ノ后・女御ニハ増テ、美麗ナル事倍々セリ。然レバ、天皇、喜ビ乍ラ輿ニ乗セテ宮ニ将返リ給ヒヌ。三千人ノ中ニ只此ノ人ナム勝レタリケル、名ヲバ楊貴妃ト云フ。然レバ、他ノ事无ク、夜ル晝ル翫ビ給ケル程ニ、世ノ中ノ政モ不知給デ、只、春ハ花ヲ共ニ興シ、夏ハ泉ニ並テ冷ミ、秋ハ月ヲ相見テ長ク、[v.10.p.31-32]冬ハ雪ヲ二人見給ケリ。此様ニテ天皇聊ノ御暇モ无クテ、此ノ女御ノ御兄ニ楊國忠ト云ケル人ニテナム、世ノ政ヲバ任セ給タリケル。此ニ依テ、世ノ極キ歎ニテナム有ケル。然レバ、世ノ人ノ云合ヘリケル様ハ、「世ニ有ラム人ハ男子ヲバ不儲ズシテ女子ヲ可儲キ也ケリ」トソ繚ケル。此ク世ノ騒ニテ有ケルヲ、其ノ時ノ大臣ニテ、安禄山ト云フ人有ケリ、心賢ク思量有ケル人ニテ、此ノ女御ノ寵ニ依テ、世ノ中ノ失ヌル事ヲ歎テ、「何デ此ノ女御ヲ失ナヒテ世ヲ直サム」ト思フ心有テ、安禄山、蜜ニ軍ヲ調ヘテ王宮ニ押入ル時ニ、天皇恐怖レ給テ、楊貴妃ヲ相具シテ王宮ヲ逃給フニ、楊國忠モ共ニ逃ル間、天皇ノ御共ニ有ル陳玄禮ト云フ有テ、楊國忠ヲ殺シツ。其ノ後、陳玄禮、鉾ヲ腰ニ差テ、御輿ノ前ニ跪テ、天皇ヲ礼シテ申シテ申サク、「君、楊貴妃ヲ哀ビ給フニ依テ、世ノ政ヲ不知給ハズ。此レニ依テ、世既□□レヌ。國ノ歎ゲキ、何事カ此レニ過ム。願クハ、其ノ楊貴妃ヲ給ハリテ、天下ノ瞋□□逶□」ト。天皇悲ビノ心深クシテ愛ニ不堪ザレバ、給フ事无シ。而ル間、楊貴妃逃テ堂ノ内ニ入テ佛ノ光ニ立副テ隠ルト云ドモ、陳玄禮、此レヲ見付テ捕テ練絹ヲ以テ楊貴妃ノ頸ヲ結テ殺シツ。天皇、此レヲ見給フニ、肝砕ケ心迷テ、涙ヲ流ス事、雨ノ如シ、見給フニ難堪カリケム。然レドモ、道理ノ至レルニ依テ、嗔ノ心ハ无シ。然テ、安禄山ハ、天皇ヲ追出シテ、王宮ニ在テ世ヲ政ツ間、即チ、死ニケリ。然レバ、玄宗、御子ニ位ヲ譲テ、我レハ大政天皇ニテ御ケルニ、尚、此ノ事ヲ思ヒ不忘ズ歎キ悲ビ給テ、春ハ花ノ散ヲモ不知シラズ、秋ハ木ノ葉ノ落ヲモ不見ズ。木ノ葉ハ庭ニ積タレドモ掃フ人モ无シ。日ニ随テハ歎ノミ増リ給ケル程ニ、方士ト云ハ蓬莱ニ行ク人ヲ云フ也、其ノ人参テ、玄宗ニ申ケル様、「我レ、天皇ノ御使トシテ彼ノ楊貴妃ノ御シ所ヲ尋ネ」ト。天皇、此レヲ聞テ、大キニ喜ムデ宣ハク、「然ラバ、彼ノ楊貴妃ガ有リ所ヲ尋テ我ニ[v.10.p.33-34]聞セヨ」ト。方士、此ノ仰ヲ奉ハリテ、上ハ虚空ヲ極メテ下ハ底根ノ國マデ求ケレドモ、遂ニ不尋得ズ成ニケリ。而ル間、或ル人ノ云ク、「東ノ海ニ蓬莱ト云フ嶋有リ。其ノ嶋ノ上ニ大ナル宮殿有リ。其ニナム玉妃ノ大真院ト云フ所有ル。其ニヅ彼ノ楊貴妃御ナル」。方士、此レヲ聞、彼ノ蓬莱ニ尋ネ至ニケリ。其ノ時ニ、山ノ葉ニ日漸ク入テ、海ノ面暗ガリ持行ク。花ノ扉モ皆閉テ人ノ音モ不為ザリケレバ、方士、其ノ戸ヲ叩ケルニ、青キ衣着タル乙女ノ鬘上タル、出来テ云ク、「汝ハ何ナル所ヨリ来レル人ゾ」ト。方士荅テ云ク、「我レハ唐ノ天皇ノ御使也。楊貴妃ニ可申キ事有ルニ依テ、此ク遥ニ尋ネ来レル也」ト。乙女ノ云ク、「玉妃、只今、寝給タリ。暫ク可待シ」ト。然レバ、方士、手ヲ□テ居タリ。而ル間、夜[アケ]ヌレバ、玉妃、方士ノ来レル由ヲ聞ニ、方士ヲ召寄セテ宣ハク、「天皇ハ平カニ御マスヤ否ヤ。亦、天寶十四年ヨリ以来今日ニ至マデ、國ニ何□□□□有ル」ト。方士、其ノ間ノ事ヲ語リ申ス。然テ、方士ニ給テ、「此レヲ持テ天皇ニ可□□□□□ノ事ハ此レヲ見テ思シ出ヨ』ト申」ト。方士申□□、「玉ノ簪ハ世ニ有ル物也。此レヲ奉タラム、我ガ君、實ト思シ不食ジ。只、昔、天皇ト君ト、忍テ語ヒ給ケム事ノ人ニ不被知ヌ有ケム、其レヲ申シ給ヘ。其レヲバ實ト思シ食サム」ト。其ノ時ニ、玉妃、暫ク思ヒ廻シテ宣ハク、「我レ、昔シ、七月七日ニ織女共ニ相見シタ、ニ、帝王、我レニ立副テ宣ヒシ事ハ、『織女・牽星ノ契リ、哀レ也。我レモ、亦、此ナム有ラムト思フ。若シ天ニ有ラバ、願クハ翼ヲ並タル鳥ト成ラム。若シ、地ニ有バ願クハ枝ヲ並タル木ト成ラム。天モ長ク地モ久クシテ終ル事有ラバ、此ノ恨ハ綿々トシテ絶ユル事无カラム』ト申セ」ト。方士、此ノ言ヲ聞テ返テ、此ノ由ヲ天皇ニ奏レバ、天皇弥ヨ悲ビ給テ、遂ニ此ノ思ヒニ不堪シテ、幾ノ程ヲ不經ズシテ失給ニケリ。彼ノ楊貴妃ノ被殺ケル所ニ、思ヒノ餘リニ、天皇行給テ見給ケル時ニ、野部ニアサヂ、風ニ並寄テ哀也ケリ。彼ノ天皇ノ御心何許也ケム。然レバ、[v.10.p.35-36]哀ナル事ノ様ニハ此レヲ云フナルベシ。但シ、安禄山ノ殺スモ、世ヲ直サムガ為ナレバ、天皇モ否不惜給ザリケル也。昔ノ人ハ天皇モ大臣モ道理ヲ知テ此ノ有ケルトナム語リ傳ヘタルトヤ。

如何でしたでしょうか？何か、ご自身でお気づきのことが有れば、これを「メモ書き」にして、使用語彙を上記に示した他の文献資料などと比較検証してみましょう。「和語」と「漢語」、そして、漢字表記の語とカタカナ表記の語とのバランス、、これに基づく譚話内容の継承とその受容性などを考えて、この時代における日本語の特徴を鑑みてください。

〈参考補助資料〉

※一九六一年(昭和36年)3月　小林芳規「平安時代の平仮名文に用いられた表記様式1」(『国語学』44)
※一九六一年(昭和36年)6月　小林芳規「平安時代の平仮名文に用いられた表記様式2」(『国語学』45)